



『和英語林集成』第三版の漢字音についての一考察

石山, 裕慈

(Citation)

神戸大学文学部紀要, 50:27-48

(Issue Date)

2023

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100481153>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100481153>



『和英語林集成』第三版の漢字音についての一考察

石山 裕 慈

1 問題の所在

筆者は、かつて石山（二〇二二）で『日葡辞書』と現代の『三省堂ポケット日用語辞典』（三省堂、二〇一九。以下「日用語辞典」と称する）に出現する漢語を分析し、日常使用の日本漢字音の歴史的な流れを考察したことがあった。従来の図式に従うと、近代以前は使用される字音が語彙的に決まっていたのに対して、現在では事実上一つに定まっているという印象を抱きがちなどころ、中世末期の時点ですでにある程度の偏りが存していたとともに、現代語でも語彙的に定まっている音が多いというのが石山（二〇二二）の結論であった。そして、全般的には一字一音の状態へと向かっている傾向はあるものの、個々の字に着目すると字音の入れ替わりや種類の増加などが見られ、複雑な様相を呈していた。その背景として、明治期の漢音流行や読み分けルールの付与などを考えたところである。

そこで、明治時代の実態というものが、次の論点として浮上してくる。呉音形と漢音形の入れ替わりがどの程度のもので、いつ頃発生したもののかなど、様々な疑問が浮かび上がる。

近世から現代に至るまでの漢語の語形変化をめぐっては、すでに様々な先行研究が発表されている。佐藤喜代治（一九七二）、佐藤亨（一九八〇）、飛田（一九九二）では、呉音から漢音へと変化した字が、その逆に比べて多いことが指摘されており、いずれの論考でも『和英語林集成』の用例が引かれている。

その一方で、『和英語林集成』第三版に出現する漢語のうち、現代語と異なった読み方をするものを分析した磯貝（一九六四）では、やはり呉音から漢音へと交代したもののよりその逆の方が多いこと、ただし「決定的な傾向とは言いきれない」ことを論じている。また木村（二〇一五）では『和英語林集成』各版と現代語とを比較し、ここでも呉音から漢音へと交代したものとその逆とはさほど比率に変わりがないことを指摘した上で、字音の交代は近世以前から発生していたという見通しを述べる。

同じ資料を用いているにも関わらず、論考によってずいぶん結論が異なっている印象を受けるのは、調査の方法や集計の基準が異なることが一因かと思われる。また、そのような差異が生じる原因の一つとして、先行研究では漢語単位で考察されてきたという事情もあったと考えられる。漢語は和語に比べると同じ語が継承されることが少なく、また意味が変化することによって語形や表記がしばしば変わるといふ、漢語特有の事情がある。

そこで本稿では、個々の漢字の音について検討を加えてみたい。一八八六年に成立した『和英語林集成』第三版（以下本稿で扱うものは単に『和英語林集成』と称する）を題材に、『日葡辞書』・日用語辞典と同じ基準で分析し、過去から現在に至る日本漢字音の流れを読み取るための手がかりを得ることが本稿の目的である。

2 『和英語林集成』第三版の漢字音の概要

『和英語林集成』は、「AISHO アイシヤウ 哀傷」のようにローマ字・仮名・漢字が明記されている資料であり、漢字と音との対応関係が明確であるという利点がある。漢字と音との対応関係を調査し、それと過去・現在の資料とを比較する手法が考えられる。手法そのものは単純なものであるとは言え、実際に調査を行っていくと判断に迷う例が多々出てくる。そこで本稿では、以下のような基準を設けた。

まず、『和英語林集成』で調査対象とするのは、漢字・仮名・ローマ字がそろっているものとした。⁽¹⁾また、この三者の内容が食い違う場合については、いずれかが誤植である公算が高いと考え、配列順序その他から、合理的と思えるものを採用した。一つの音に複数の字が当てられている例は省略した一方、一つの字に複数の漢字が当てられているのは検討対象に含め、両方の例に算入した。

『和英語林集成』には、「HITSU-ZEN ヒツゼン 然必」のように漢字が入れ替わっていると思しきものが多々見られる。これなどは「必然」の誤りであると容易に推察される例と言えるが、中には正しい形がどちらなのか判定しがたい例も出現する。後ほど「位置による読み分けルール」も話題に上ることから、本稿では割愛した。重箱読み・湯桶読みの語に含まれているものも省略した。

次に、調査する漢字の範囲と字音の認定については、石山(二〇二二)の方針を踏襲する。すなわち、調査範囲は現行の常用漢字とし、常用漢字表かあるいは漢和辞書『漢辞海』第四版(三省堂、二〇一七)のいずれかで音として認定されている形を、音として認める。⁽²⁾その上で、呉音・漢音・唐音・慣用音の種別も『漢辞海』に従うものと

する。例えば「反」の場合、『日葡辞書』では「ハン(反魂香)」「ヘン(反覆)」「ホン(反古)」「ホウ(反古)」「ヘ(反吐)」、『和英語林集成』では「ハン(反射など)」「ホウ/ホ(反故)」、日用語辞典では「ハン(反省など)」「ホン(謀反)」「ヘ(反吐)」などとなっており、複雑な様相を呈している。ここで常用漢字表を確認すると、ハン・ヘン・タンが音として扱われており、『漢辞海』では漢音ハン、呉音ヘン・ホンとされている。これにより、『日葡辞書』ではハン・ヘン・ホンの三音、『和英語林集成』ではハンのみ、日用語辞典ではハン・ホンの二音を有していると見なすことにして、「ヘ」「ホウ」などは考察の対象外ということになる。

ある漢字に対応している呉音形・漢音形を確定するには、歴史的文献による帰納的な調査が必要であることは沼本(二〇一四)などが力説するところで、『韻鏡』から演繹的に導き出すことを強く戒めるとともに、現行の漢和辞典がいまだにそのような手法を採用していることにも苦言を呈している。しかし、石山(二〇一三)で検証したように、最近は帰納的手法によった音形を採用している漢和辞典も増えてきている。『漢辞海』では「鎌倉・室町以前の古辞書などにのこる字音資料にもとづくことにした(本辞典のねらいと特色)」とされており、先述の問題点を吟味したことが示されている。音形の認定をどの程度厳密に行うかなど議論の余地はあるとはいえ、明確な基準を得られるという利点を重視することとした。

漢和辞典や常用漢字表では、単独での音形しか掲載されていないことから、漢語を形成した際の扱いも決めておく必要がある。入声音が促音化する場合がその例であり、「錯」は「サク(錯乱)」「サツ(錯簡)」の二音を有していると見るのか、「甲(コウ(甲乙)／カッ(甲冑))」はどうか、といったごとくである。これについては、常用漢字表での扱い方を参考にした。現代日本語ではカ行音の直前の k 入声字、カサタハ行音の直前の t 入声字は促音化するの

が原則であり、常用漢字表で示された字音には、そのような促音化例までもが包含されていると考えられる。「錯：サク（錯誤、錯覚、交錯）」などのごとくである（傍線筆者）。従って、k入声・t入声の促音化例は、それぞれ常用漢字表で示されているものと同一視する^四。その一方で、p入声（t入声音化したものを除き）の場合は規則性に乏しいことから、常用漢字表では「法：ホウ、ハツ、ホツ」のように別の音として扱われている。従って本稿では「甲」のカツは字音として扱わないことになる。なお連濁は、呉音漢音の範囲に収まるものであればそれに入れた。「中：チュウ／ジュウ」は呉音漢音の関係にあるものではないのだが、常用漢字表に合わせて別の音として扱った。半濁音例はハ行子音と同一のものとして扱った。

以上の基準を『日葡辞書』と日用語辞典にも適用する。石山（二〇二二）でも基本的にこの方針を採ってはいしたが、本稿作成に当たって基準を厳格にした（ある意味でしゃくし定規なものとなった）ため、数値は石山（二〇二二）と異なる部分がある。

上述の基準に従って集計すると、まず『和英語林集成』で音が対応している常用漢字は一八六四字であり、そのうち一音のみを有している字は一四三三五字（そのうち一九五字は一回しか使われていないものである）、複数種類の音を有しているのは四二九字である。

次に、時代を遡る『日葡辞書』では、音を有している常用漢字は一六三八字、そのうち一音のみを有しているのは一一九八字（うち一八九字は一回のみ出現）、複数種類の音を有しているのは四四〇字となる。最後に、現代の日用語辞典では、音を有している常用漢字は二〇二〇字、そのうち一音のみを有しているのは一六八三字（うち一〇〇字は一回のみ出現）、複数種類の音を有しているのは三三七字である。

『日葡辞書』→『和英語林集成』→日用語辞典と、現代に近づくにつれて音を有する常用漢字が増えてくる、すなわち常用漢字の使用頻度が上がってくるのは、常用漢字が現代語に対応したものであることをよく示している。また、現代に近づくほど複数種類の音を有する字の割合が減ってきているのであり、これは字音の整理が進んで「漢字音の一元化」が進行していることをうかがわせる。

その一方で、『日葡辞書』と『和英語林集成』とを比べると、複数音を有する字の割合は減っているものの、絶対数で見るとそれほど変わらないのであり、両者がどれほど重なり合うのか（複数種類の音を有する字というのは、ある程度定まっているものだったのか）、あるいは一字複数音の内実というのは資料によって異なっているのかなど、様々な疑問が生じるところである。

3 「一字複数音」の資料間比較

まず、各資料における一字複数音字の重なり具合を見た上で、それぞれの内実に立ち入ることにする。三者の関係を、次のように図示して考えることにしたい。^(五)例えば a とは、三種全てで「カ」「ケ」という複数種類の音を有している「家」のような字のことであり、このような常用漢字が二五六字見られる意である。c とは『日葡辞書』では「コウ」と「キョウ」という複数種類の音を有しているのに対して、あとの二つでは「コウ」という一音しか有していない「孝」のような字のことを指す。

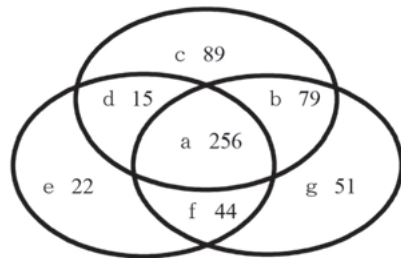
これによると、複数音を有する漢字というのは「ある程度定まっている」と表現できるほどには重なっていない印象

を受ける。ただ、図に現れた漢字は五〇〇字以上に上るのであり、内実は様々である。例えばbに属する「永」は、『日葡辞書』ではエイ七例・ヨウ七例、『和英語林集成』ではエイ九例・ヨウ一例、日用語辞典ではエイ一〇例・ヨウの例なしという具合で、「永」のヨウが勢力を失っていき、エイに一元化される様子がよく表れている。しかしその反面、eに分類されている「泌」というのは、『日葡辞書』と『和英語林集成』に例がなく、日用語辞典でヒ一例、ヒツ二例が出現する字であり、これから何かしらの傾向を読み取ることができない。このように、一字に複数音が対応しているという事実のみでは推し量れないものもあることから、ここでは用例数の多いもの、具体的には各資料で一〇例以上出現する字をもっぱらの検討対象とする。

各資料で一〇例以上出現する字を列挙すると、本稿末尾に付した〈資料〉のようになる。まずはこれらにどのような性質のものが含まれているか、分類することを試みる。以下、用例に言及する際には、四角で囲った箇所を通し番号を用いる。

まず001は、「アク…わるい、オ…にくむ」という、中国語での意味の違いに対応したものであり、日本語での歴史的变化を反映したものではない。同様の例として、007 018 056 059 067 100 126 249 250 254 257が挙げられる。この種のものに関しては、資料によって出現する比率が異なっていたとしても本質的な意味はなく、また当該例が出現しない場合であっても、この意味を含む語が偶然採録されなかっただけで、潜在的には存在していた可能性は十分にある。従って、以後の検討対象からは除くことにする。また、p入声字の「ㄅ」ㄅ」の差異(052 058 075 171)、t入声字の

『日葡辞書』



日用語辞典

『和英語林集成』

「ㄅ」(ㄅ)の差異(004 022 067 101 136 183 184 204 221 259)についても、以後の研究対象から除く。ただ、「ㄅ」表記の減少傾向は見出せるところである。

さて、先ほどの図によると、eやfなどは時代を経るに従って一字に対応する音が増えていく一群ということになり、いささか奇妙なものに思われる。この内実は様々で、まず246の「サ」は、近世以降生じた用法に「再」の漢字が当てられるようになったものであり、『日葡辞書』に存在しないのは時代的な要因と言える。次に242 264は、それぞれ「胡乱」「知客」で使われる唐音形の有無が関わっている。いずれも鎌倉時代以降に用例が見られることから、これらの音が廃用・復活したわけではなく、これらの語を掲載するか否かという辞書の方針の問題だと考えられる。なお240のキン(剽軽)は近世唐音であり、時代的なものと辞書の方針とが絡み合っている。

このように注意を要する例も存するとは言え、eやfなどに比べると、時代を追うに従って音の種類を減じるbやcの方が数が多いのであり、その中には前出の178や222のように「漢字音の一元化」の表れと判断できるものが多く含まれている。また080や095のように時代を追うごとに片方の例に傾斜していく例も多い印象を受けるのであり、第2節で見た、時代を経るに従って複数の音を有する字が減るといふ傾向を想起させる。

石山(二〇二二)では、『日葡辞書』と日用語辞典を題材にして、両資料における一字複数音の偏りの内実を検出した。今般調査した『和英語林集成』を加えるとともに、呉音・漢音の区別も取り入れ、使用頻度の偏りというものを、より複眼的に考察してみたい。

石山(二〇二二)での議論を踏まえ、ここでも一字に対して最も多く使われている音の用例数が、次に多く使われている音の用例数の三倍以上あれば偏りがあると認めることにすると、△資料▽で列挙した例からp入声の「ㄅ」

「 \sim ツ」の差異などを除いた二四五字のうち、偏りのあるのは『日葡辞書』で一六九字、『和英語林集成』では一七九字、日用語辞典では二一四字となる。時代が進むと一字一音に近づいていく様子が観察できるとはいえ、『和英語林集成』の状況というのはむしろ『日葡辞書』に近いものであると言える。

先行研究によると、近世から現代に至るまで、また『和英語林集成』以後現代に至るまで、呉音から漢音に交代した語は、その逆よりも多いという傾向が指摘されていた。個々の漢字に着目した場合について検証してみたい。

先述の基準を用いると、それぞれの字はA「呉音に偏っている」、B「偏りが存しない」、C「漢音に偏っている」状態に分類できる^⑤。例えば002の場合は時代を経るごとにA \downarrow B \downarrow Cと変化しており、207は一貫してAということになる。この要領で、それぞれの推移をたどったものが何例ずつ見られるかをまとめると、次のようになる。B \downarrow C \downarrow Aのような、例が存在しないものは省略した。

① A \downarrow A \downarrow A	六〇
② A \downarrow A \downarrow B	三
③ A \downarrow B \downarrow A	四
④ A \downarrow B \downarrow B	一二
⑤ A \downarrow B \downarrow C	一四
⑥ A \downarrow C \downarrow B	一

⑦ A \downarrow C \downarrow C	五
⑧ B \downarrow A \downarrow A	九
⑨ B \downarrow B \downarrow B	一二
⑩ B \downarrow B \downarrow C	一九
⑪ B \downarrow C \downarrow B	二
⑫ B \downarrow C \downarrow C	三四

⑬ C \downarrow B \downarrow A	一
⑭ C \downarrow B \downarrow B	一
⑮ C \downarrow B \downarrow C	三
⑯ C \downarrow C \downarrow C	五〇

漢字音を調査する場合は「過去と現在とで読み方が異なっている漢語」に目が向きがちで、先行研究でもそのよう

な例が重点的に調査されてきたところであるが、半ば当然のことながら、①⑩のような「過去から現在に至るまで一貫して呉音（漢音）」というものが多いことが分かる。しかも143のホ、214のコンのような、珍しい方の形が各資料を通して一例以下しか見られない字というのが①では一七例、⑩でも五例存するのであり、『日葡辞書』の時点で多数派への吸引力が働いていた場合が多々あったことがうかがえる。^⑤しかしその一方で、⑤⑦⑬のように優勢な形が反転している一群はあり、しかも36 73 244 253というのは『日葡辞書』で一例以下しかなかったものが後年優勢になっている例である。ある時点において、後年どの形が優勢になるかを予測するのは困難ということと思われる。

4 日本漢字音の歴史的変化における『和英語林集成』の位置

前節の数値を再掲すると、二四五字中偏りがあるのは『日葡辞書』で一六九字、『和英語林集成』で一七九字、日用語辞典で二一四字であった。数値の上では『和英語林集成』は現代語よりむしろ『日葡辞書』の方に近い印象を受けるのであり、『和英語林集成』の位置づけというものが一つの論点になる。

前節で三資料全体の推移を見たのに続き、次にX『日葡辞書』から『和英語林集成』、Y『和英語林集成』から日用語辞典」という具合に、二つに分けて観察することにする。それぞれに分けた表を作成すると、以下のようになる。ここでは用例が存しないもの「なし」として載せた。

X 『日葡辞書』 ↓ 『和英語林集成』

i	A ↓ A	六三
ii	A ↓ B	三〇
iii	A ↓ C	六

iv	B ↓ A	九
v	B ↓ B	三一
vi	B ↓ C	三六

vii	C ↓ A	なし
viii	C ↓ B	五
ix	C ↓ C	五〇

Y 『和英語林集成』 ↓ 『日用語辞典』

i	A ↓ A	六九
ii	A ↓ B	三
iii	A ↓ C	なし

iv	B ↓ A	五
v	B ↓ B	二五
vi	B ↓ C	三六

vii	C ↓ A	なし
viii	C ↓ B	三
ix	C ↓ C	八九

これによると、いずれの期間でも i や ix の例は多いのであり、元から優勢だった呉音形（漢音形）の優位が崩れることはそれほどないことが読み取れる。ただし呉音形が優勢だったものに関しては、X ii iii の多さがやや目立つ。X ii のうち一四例が『日用語辞典』で漢音へと傾斜するのであり、漢音が伸張していく一端が読み取れる。それに対して Y ii はそれほど存しないのであり、『和英語林集成』で呉音優位が固まっていたものは、それ以後あまり変動しなかった様子が見える。

呉音・漢音で偏りの存しない字は、『日葡辞書』で X iv v vi の七六字、『和英語林集成』で Y iv v vi の六六字と大差のない数値であり、その後の推移についても似通った傾向を示している。すなわち最も多いのは漢音に傾斜していく

ものであつて、呉音へと傾斜するものの少なさも踏まえると、漢音が生産力の高い字音体系であることを示しているものと考えられる。また、『和英語林集成』から日用語辞典に至る際にも同様の変化を生じていることからは、明治以後にも漢字音の整理が進んでいることが分かるのであり、一連の変化は絶えず存したことが読み取れるのである。

もう一つ注目されるのは、いずれかへの傾斜を生じないまま次の段階に至る字が相当数見られることである（vの例）。このような場合、現代日本語では意味や位置による読み分けが行われているということが原野（一九九五）・屋名池（二〇〇五）などの先行研究で述べられていて、漢字音の一元化へと向かう整理の一環というのが屋名池（二〇〇五）の見立てである。それでは『和英語林集成』ではそのような読み分けが存するのか、ないし読み分けルールが付与されつつあるのか、前後と比較しつづいてみたい。屋名池（二〇〇五）で「位置による読み分けタイプ」として挙げられている一〇字が、各資料の二字漢語においてそれぞれの音が語頭・語尾いずれに分布しているかを調査すると、次のようになる。^五

大					
尾			頭		
用	英	葡	用	英	葡
〇	三三二	〇	六六二	六六	八七
二五	一〇	一三	一八	一	八二
					タイ
					ダイ

世					
尾			頭		
用	英	葡	用	英	葡
八	八	二四	一八	一一	一四
二四	二三	一二	三	五	五
					セ
					セイ

力					
尾			頭		
用	英	葡	用	英	葡
九	二二	三四	一〇	三	三
五〇	二九	九	〇	三	〇
					リキ
					リヨク

用例の多寡もあり確証が持てない部分はあるものの、時代を追うごとに太線枠に収まる例が増える傾向が読み取れるほか、字による温度差というものももうかがえる。すなわち「米」などは『日葡辞書』の段階ですでに今日と同じよ

米						
尾			頭			
用	英	葡	用	英	葡	
一	一	二	三	二	五	ベイ
五	一〇	一三	〇	〇	〇	マイ

男						
尾			頭			
用	英	葡	用	英	葡	
〇	〇	〇	四	三	〇	ダン
二	七	八	一	五	五	ナン

後						
尾			頭			
用	英	葡	用	英	葡	
〇	一	一	三	一	二	コウ
二	〇	一	二	八	一	ゴ

色						
尾			頭			
用	英	葡	用	英	葡	
四	六	一	一	五	一	シキ
三七	二四	二五	〇	〇	〇	シヨク

木						
尾			頭			
用	英	葡	用	英	葡	
三	六	四	一	一	一	モク
八	一〇	二四	一	三	四	ボク

日						
尾			頭			
用	英	葡	用	英	葡	
六	一	二	一	二	一	ニチ
二四	四九	四六	〇	〇	一	ジツ

一						
尾			頭			
用	英	葡	用	英	葡	
二	五	/	五	二	/	イチ
一〇	二	/	〇	一	/	イツ

うな状況にあるのに対して、「日」「力」などはそれより遅れ、さらに「世」などは今日でも読み分けルールと称するには例外が多いように感じられる。「世」は原野（一九九五）でも「語順による読み分け」に入れられていないのであり、認定するか否かが研究者間で一致していないことにも留意したい。

なお過去の日本語の「意味による読み分け」の方は、いささか慎重な対応を要することから深入りできないが、『和英語林集成』における三字の「○○+人」については、原野（一九九五）が指摘する、前項が「する動詞」の場合にはニン、名詞ないし「ナ形容詞」の場合にはジンという傾向におおよそ沿っているように思われる。^{〔五〕}つまり今日のあり方は、ある時期に確立したのではなく、徐々に整備が進んできたものであり、そして現代に至っても完成されていないものと見るべきものかと思われる。

5 結論

本稿では、石山（二〇二二）での検討内容に『和英語林集成』第三版という補助線を加え、日本漢字音の歴史について見てきた。その結果、『和英語林集成』はある部分では現代語と似た傾向を示す一方で、むしろ『日葡辞書』に似た部分もあった。『和英語林集成』の前にも後にも、日本漢字音の歴史的变化が進行していたのであり、ある特定の時期に日本漢字音に劇的な変化が起こり、完了したわけではなかったというのが本稿の結論である。

その一方で、辞書によって唐音語を掲載するか否かが割れるなどといった、資料的な限界もつきまとった。さらに様々な時代の資料を調査して精度を高めるとともに、敢えて『和英語林集成』と近い時期の資料を調査する必要も感

じられた。いずれも今後の課題としたい。

(付記)

本稿は、科研費「明治大正時代の実態を通して見た日本漢字音史に関する研究(基盤研究(C) 21K00557)」による研究成果の一部である。またデータの作成に当たっては、本学博士課程後期課程学生の何芸凡さんの助力を得た。

(参考文献)

石山裕慈(二〇一三)『「字音仮名遣い」の現状と提言』(『弘前大学国語国文学』三四)

——(二〇一八)『漢字音の一元化』の歴史』(『国語と国文学』九五—一〇)

——(二〇二二)『日常使用の日本漢字音の歴史——『日葡辞書』と現代日用語辞典との比較を通して——』

(『国語と国文学』九九—九)

磯貝俊枝(二九六四)『明治初期における漢語の研究——『和英語林集成』を通して見た漢語の推移——』(『日本文

学』一二)

木村 一(二〇一五)『和英語林集成の研究』(明治書院)

佐藤喜代治(一九七二)『国語語彙の歴史的研究』(明治書院)

佐藤 亨(二九八〇)『近世語彙の歴史的研究』(桜楓社)

沼本克明(二〇一四)『帰納と演繹とはさまに揺れ動く字音仮名遣いを論ず』(汲古書院)

原野亮子（一九九五）「中上級学習者のための漢字の読み指導——ルールによる字音漢字の読み分けについて——」

（『北九州大学文学部紀要』五二）

飛田良文（一九九二）『東京語成立史の研究』（東京堂出版）

屋名池誠（二〇〇五）「現代日本語の字音読み取りの機構を論じ、「漢字音の一元化」に及ぶ」（『築島裕傘寿』国語

学論集』、汲古書院）

〈資料〉（『日葡辞書』／『和英語林集成』／日用語辞典の要領で示す）

■【a】001悪（アク120・オ2／アク33・オ5／アク48・オ5）、002衣（イ14・エ46／イ15・エ7／イ18・エ3）、003遣（イ4・ユイ7／イ21・ユイ8／イ36・ユイ2）、004一（イチ200・イツ224／イチ36・イツ63／イチ69・イツ133）、005陰（イン19・オン2／イン21・オン1／イン19・オン1）、006隠（イン11・オン1／イン15・オン2／イン17・オン1）、007易（イ3・エキ13／イ3・エキ7／イ8・エキ5）、008益（エキ7・ヤク6／エキ10・ヤク3／エキ17・ヤク2）、009遠（エン34・オン10／エン17・オン2／エン32・オン1）、010音（イン18・オン20／イン9・オン16／イン6・オン47）、011下（ア1・カ43・ゲ75／カ38・ゲ44／カ54・ゲ27）、012化（カ2・ケ22／カ19・ケ12／カ45・ケ6）、013花（カ88・ケ10／カ25・ケ9／カ26・ケ3）、014家（カ43・ケ45／カ60・ケ22／カ50・ケ10）、015会（エ17・カイ17／エ10・カイ62／エ7・カイ62）、016解（ケ1・ゲ18／カイ21・ゲ8／カイ45・ゲ8）、017外（ガイ33・ゲ13／ガイ35・ゲ6／ガイ75・ゲ5）、018楽（ガク16・ラク37／ガク10・ラク23／ガク23・ラク24）、019間（カン4・ケン9／カン25・ケン8／カン34・ケン3）、020眼（ガン50・ゲン11／ガン17・ゲン1／ガン43・ゲン1）、021気（キ86・ケ19／キ100・ケ4／キ137・ケ16）、022吉（キチ6・キツ11／キチ2・キツ8／キチ6・キツ8）、023客（カ1・カク15・キヤク12／カ1・カク32・キヤク9／カク13・キヤク25）、024逆（ギヤク17・ゲキ10／ギヤク17・ゲキ5／ギヤク17・ゲキ1）、025宮（キユウ15・クウ2・グウ7／キユウ10・ク3・クウ2・グウ7／キユウ5・ク1・クウ2・グウ7）、026牛（ギユウ31・ゴ10／ギユウ12・ゴ1／ギユウ11・ゴ1）、027去（キヨ13・コ5／キヨ10・コ2／キヨ13・コ1）、028居（キヨ26・コ4／キヨ28・コ1／キヨ18・コ1）、029虚（キヨ28・コ5／キヨ26・コ2／キヨ21・コ2）、030御（ギヨ23・ゴ122／ギヨ14・ゴ33／キヨ14・ゴ31）、031供（ク9・グ7／キヨウ2・ク7・グ4／キヨウ14・ク3・グ1）、032強（キヨウ3・ゴウ11／キヨウ9・ゴウ13／キヨウ36・ゴウ10）、033業（ギヨウ18・ゴウ23

/ギョウウ27・ゴウ11/ギョウウ66・ゴウ11)、**034極**(キョク2・ゴク29/キョク14・ゴク7/キョク22・ゴク12)、**035金**(キン66・コン14/キン80・コン14/キン89・コン8)、**036形**(ギョウウ40・ケイ1/ギョウウ9・ケイ19/ギョウウ7・ケイ38)、**037経**(キョウウ41・キン4・ケイ6/キョウウ9・キン2・ケイ27/キョウウ7・キン1・ケイ20)、**038權**(ケン10・ゴン2/ケン28・ゴン2/ケン39・ゴン2)、**039元**(ガン6・ゲン8/ガン3・ゲン13/ガン7・ゲン19)、**040言**(テン39・ゴン39/ケン56・ゴン21/ケン74・ゴン12)、**041嚴**(ケン5・ゴン6/ケン10・ゴン1/ケン29・ゴン1)、**042後**(ゴ44・コウ28/ゴ26・コウ20/ゴ33・コウ38)、**043口**(ク6・コウ30/ク6・コウ22/ク6・コウ36)、**044工**(ク16・コウ3/ク8・コウ16/ク7・コウ25)、**045公**(ク24・コウ17/ク7・コウ48/ク2・コウ80)、**046功**(ク4・コウ18/ク2・コウ19/ク1・コウ16)、**047行**(アン6・ギョウウ87・コウ20/アン6・ギョウウ45・コウ42/アン3・ギョウウ32・コウ104)、**048皇**(オウ4・コウ13/オウ1・コウ14/オウ2・コウ16)、**049紅**(ク3・コウ19/ク1・コウ10/ク1・ケイ1・コウ13)、**050黄**(オウ23・コウ11/オウ13・コウ9/オウ11・コウ5)、**051興**(キョウウ14・コウ6/キョウウ8・コウ8/キョウウ11・コウ16)、**052合**(カツ3・ガツ8・コウ9・ゴウ22/カツ1・ガツ7・コウ3・ゴウ28/カツ1・ガツ16・ゴウ48)、**053今**(キン1・コン19/キン2・コン22/キン1・コン17)、**054砂**(サ9・シヤ13/サ3・シヤ7/サ9・シヤ2)、**055歳**(サイ14・セイ3/サイ17・セイ1/サイ14・セイ1)、**056作**(サ14・サク59・ソ2/サ12・サク33・ソ1/サ13・サク48)、**057殺**(サツ1・セツ14/サツ17・セツ1/サイ2・サツ38・セツ2)、**058雜**(サツ11・ゾウ26/サツ20・ゾウ10/サツ35・ゾウ8)、**059參**(サン44・シン3/サン41・シン2/サン40・シン1)、**060士**(シ8・ジ23/シ25・ジ3/シ28・ジ2)、**061子**(シ134・ス26・ツ1/シ107・ス17/シ83・ス9)、**062次**(シ9・ジ3/シ9・ジ4/シ1・ジ25)、**063自**(シ1・ジ59/シ2・ジ63/シ1・ジ99)、**064事**(シ2・ジ82・ズ1/ジ87・ズ1/ジ85・ズ1)、**065持**(ジ24・チ2/ジ15・チ1/ジ23・チ1)、**066時**(シ3・ジ42/シ2・ジ31/シ1・ジ55)、**067質**(シチ6・シツ5/シチ2・シツ18/シチ1・シツ27・チ1)、**068尺**(シヤク17・セキ2/シヤク7・セキ5/シヤク10・セキ1)、**069手**(シユ15・ス1/シユ23・シユ11・ス1/シユ38・ス1)、**070主**(シユ41・シユウ4・ス9/シユ44・ス6/シユ53・ス3)、**071守**(シユ10・ス5/シユ11・ス3/シユ15・ス1)、**072宗**(シユ2・シユウ28・ソウ4/シユウ19・ソウ4/シユウ13・ソウ3)、**073修**(シユ19・シユウ1/シユ9・シユウ5/シユ4・シユウ31)、**074衆**(シユ59・シユウ4/シユ3・シユウ17/シユ1・シユウ15)、**075十**(ジツ10・シユウ1・ジユウ48/ジツ4・ジユウ23/ジツ2・ジユウ9)、**076重**(ジュウ42・チヨウウ10/ジュウ12・チヨウウ20/ジュウ46・チヨウウ15)、**077從**(ジュウ10・シヨウ4/ジュウ22・シヨウ1/ジュウ22・シヨウ3)、**078所**(シヨ32・ソ3/シヨ66・ソ2/シヨ69・ソ1)、**079女**(シヨ28・ニヨ21・ニヨウ8/ジヨ36・ニヨ13・ニヨウ3/ジヨ32・ニヨ4・ニヨウ1)、**080上**(シヨウ47・ジヨウ97/シヨウ14・ジヨウ81/シヨウ4・ジヨウ63)、**081城**(ジヨウ42・セイ2/ジヨウ17・セイ1/ジヨウ13・セイ1)、**082情**(シヨウ7・セイ8/ジヨウ42・セイ3/ジヨウ77・セイ1)、**083色**(シキ33・シヨク25/シキ13・シヨク24/シキ16・シヨ

ク38、**084食**(ジキ26・シヨク28/ジキ11・シヨク42/ジキ5・シヨク70、**085職**(シキ1・シヨク20/シキ4・シヨク29/シヨク53・ソク1)、
 (シン34・ジン22/シン49・ジン28/シン30・ジン12)、**087人**(ジン128・ニン198/ジン100・ニン95/ジン103・ニン32)、**088図**(ズ14・ト2/ズ10・ト4/
 ズ31・ト8)、**089数**(シユ13・ス40・スウ2/シユ2・ス8・スウ27/ス2・スウ39)、**090世**(セ62・セイ18/セ29・セイ31/セ29・セイ28)、**091生**(サ
 ン2・シヨウ90・セイ8/サン1・シヨウ36・セイ40/シヨウ23・セイ78)、**092成**(シヨウ13・セイ4/ジヨウ4・セイ14/ジヨウ2・セイ65)、**093声**
 (シヨウ13・セイ19/シヨウ5・セイ6/シヨウ1・セイ31)、**094性**(シヨウ18・セイ3/シヨウ11・セイ12/シヨウ12・セイ64、**095星**(シヨウ4・セ
 イ17/シヨウ2・セイ22/シヨウ1・セイ23)、**096清**(シヨウ2・セイ29/シヨウ1・シン1・セイ12/シヨウ2・セイ29)、**097精**(シヨウ10・セイ20
 /シヨウ4・セイ29/シヨウ3・セイ47)、**098石**(シヤク2・ジャク5・セキ46/コク2・シヤク5・セキ81/コク2・シヤク4・ジャク1・セキ81)、
099赤(シヤク9・セキ3/シヤク3・セキ8/シヤク2・セキ10)、**100切**(サイ2・セツ17/サイ1・セツ16/サイ2・セツ24)、**101節**(セチ2・セツ
 24/セチ1・セツ23/セチ1・セツ29、**102前**(セン1・ゼン67/セン4・ゼン43/セン1・ゼン60、**103然**(ゼン17・ネン8/ゼン40・ネン6/ゼン
 75・ネン4)、**104素**(ス9・ソ9/ス5・ソ23/ス11・ソ35)、**105相**(シヨウ7・ソウ63/シヨウ5・ソウ34/シヨウ10・ソウ46)、**106木**(タ4・ダ3・
 タイ18・ダイ1/タ3・ダ3・タイ9・ダイ2/タ3・タイ11)、**107体**(タイ54・テイ10/タイ46・テイ8/タイ77・テイ8)、**108対**(タイ17・ツイ6
 /タイ20・ツイ3/タイ39・ツイ6)、**109大**(タイ97・ダイ168/ダ1・タイ81・ダイ73/タイ66・ダイ57)、**110代**(タイ6・ダイ47/タイ4・ダイ56/
 タイ3・ダイ49)、**111台**(タイ6・ダイ33/タイ10・ダイ29/タイ6・ダイ20)、**112地**(ジ87・チ15/ジ26・チ56/ジ39・チ87)、**113茶**(サ9・チャ45
 /サ5・ダ1・チャ30/サ6・チャ30)、**114着**(ジャク11・チャク18/ジャク3・チャク22/ジャク1・チャク55)、**115中**(ジユウ23・チュウ149/ジユ
 ウ5・チュウ90/ジユウ3・チュウ89)、**116丁**(チヨウ17・テイ1/チヨウ9・テイ2/チヨウ13・テイ8)、**117直**(ジキ21・チヨク10/ジキ9・チヨ
 ク19/ジキ12・チヨク44)、**118沈**(ジン7・チン13/ジン2・チン11/ジン1・チン20)、**119通**(ツ3・ツウ31/ツ1・ツウ51/ツ1・ツウ66)、**120弟**
 (ダイ2・デ3・テイ9/ダイ2・デ1・テイ8/ダイ2・デ2・テイ10)、**121定**(ジヨウ43・テイ2/ジヨウ27・テイ18/ジヨウ11・テイ77)、**122伝**
 (テン5・デン29/テン1・デン23/テン1・デン41)、**123殿**(テン8・デン23/テン1・デン13/テン1・デン13)、**124途**(ズ3・ト8/ズ1・ト12/
 ズ2・ト27)、**125都**(ツ3・ト9/ツ4・ト8/ツ4・ト11)、**126度**(タク4・ト2・ド32/タク1・ト3・ド37/タク2・ト2・ド56)、**127灯**(チン
 1・トウ32・ドン1/チン2・トウ12・ドン1/チン1・トウ23・ドン1)、**128頭**(ズ25・チュウ5・ト2・トウ47/ズ8・チュウ1・ト2・トウ28
 /ズ10・チュウ2・ト1・トウ61)、**129道**(トウ20・ドウ105/トウ2・ドウ86/トウ3・ドウ68)、**130内**(ダイ7・ナイ76/ダイ7・ナイ72/ダイ4・
 ナイ71)、**131日**(ジツ61・ニチ62/ジツ52・ニチ46/ジツ29・ニチ31)、**132馬**(バ69・マ4・メ6/バ41・マ6・メ4/バ31・マ5・メ1)、**133白**(ハ

ク62・ビヤク54／ハク46・ビヤク9／ハク46・ビヤク4)、134博(ハク6・バク4／ハク8・バク4／ハク10・バク5)、135筭(ハツ14・ホツ15／ハツ50・ホツ15／ハツ102・ホツ7)、136罰(バチ6・バツ16／バチ2・バツ14／バチ1・バツ16)、137判(ハン15・バン12／ハン25・バン9／ハン19・バン8)、138微(ビ14・ミ6／ビ11・ミ4／ビ33・ミ1)、139病(ビヨウ67・ヘイ1／ビヨウ38・ヘイ1／ビヨウ52・ヘイ1)、140貧(ヒン19・ピン4／ヒン14・ピン1／ヒン16・ピン1)、141不(フ140・ブ6／フ122・ブ7／フ152・ブ2)、142夫(フ20・ブ12・フウ3／フ20・ブ10・フウ4／フ18・ブ2・フウ4)、143布(フ18・ホ1／フ19・ホ1／フ31・ホ1)、144武(フ24・ム16／フ24・ム2／フ20・ム2)、145風(フ17・フウ95／フ10・フウ64／フ7・フウ83)、146服(フク13・ブク15／フク38・ブク4／フク46・ブク1)、147物(ブツ22・モツ3／ブツ63・モツ30／ブツ66・モツ13)、148分(フ7・フン14・ブン61／フ6・フン8・ブン79／フ4・フン3・ブン88)、149文(ブン28・モン55／ブン56・モン29／ブン72・モン17)、150聞(ブン9・モン11／ブン12・モン8／ブン21・モン4)、151平(ヒヨウ2・ビヨウ2・ヘイ26／ビヨウ3・ヘイ44／ヒヨウ1・ビヨウ1・ヘイ44)、152兵(ヒヨウ28・ヘイ11／ヒヨウ7・ヘイ45／ヒヨウ5・ヘイ29)、153便(ビン20・ベン13／ビン11・ベン16／ビン8・ベン23)、154母(ボ15・モ7／ボ21・モ1／ボ27・モ3)、155奉(フ10・ホウ11／フ4・ホウ19／フ2・ホウ24)、156法(ハツ8・ホウ138・ホツ16／ハツ2・ホウ105・ホツ3／ハツ2・ホウ72・ホツ1)、157亡(ボウ11・モウ4／ボウ14・モウ3／ボウ13・モウ1)、158望(ボウ5・モウ14／ボウ17・モウ5／ボウ35・モウ5)、159謀(ボウ14・ム3／ボウ15・ム1／ボウ14・ム1)、160木(ボク31・モク20／ボク15・モク20／ボク15・モク16)、161末(バツ7・マツ20／バツ6・マツ19／バツ2・マツ32)、162万(バン69・マン34／バン25・マン14／バン38・マン8)、163無(フ69・ム121／フ26・ム108／フ21・ム103)、164名(ミヨウ33・メイ43／ミヨウ25・メイ55／ミヨウ13・メイ81)、165命(ミヨウ10・メイ36／ミヨウ5・メイ42／ミヨウ1・メイ51)、166明(ミヨウ48・メイ34／ミヨウ19・メイ38／ミヨウ8・ミン1・メイ60)、167目(ボク7・モク26／ボク1・モク37／ボク1・モク48)、168役(エキ1・ヤク25／エキ9・ヤク26／エキ14・ヤク22)、169有(ウ22・ユウ7／ウ18・ユウ20／ユ8・ユウ52)、170遊(ユ6・ユウ17／ユ2・ユウ22／ユ1・ユウ36)、171立(リツ6・リュウ13／リツ23・リュウ18／リュウ2・リツ40)、172流(リュウ28・ル9／リュウ41・ル9／リュウ70・ル6)、173力(リキ42・リヨク14／リキ29・リヨク34／リキ21・リヨク55)、174札(ライ9・レイ25／ライ4・レイ38／ライ2・レイ30)、175靈(リヨウ11・レイ42／リヨウ6・レイ25／リヨウ5・レイ26)、176露(ロ18・ロウ2／ロ11・ロウ2／ロ22・ロウ1)、177和(オ2・カ5・ワ26／オ1・カ6・ワ36／オ1・ワ39)。

■【b】178永(エイ7・ヨウ7／エイ9・ヨウ1／エイ10)、179園(エン14・オン3／エン12・オン1／エン13)、180温(ウン10・オン4／ウン1・オン16／オン23)、181火(カ58・コ6／カ35・コ1／カ40)、182敬(キョウ11・ケイ2／キョウ3・ケイ14／ケイ20)、183結(ケチ2・ケツ15／ケチ2・ケツ21／ケツ42)、184血(ケチ1・ケツ26／ケチ1・ケツ36／ケツ49)、185月(ガチ19・ガツ25・ゲツ66／ガツ8・ゲツ37／ゲツ31)、186語(キョ1・ゴ30／

- ギョ1・ゴ27/ゴ55)、**187向**(キョウ1・コウ9/キョウ2・コウ8/コウ25)、**188香**(キョウ16・コウ52/キョウ3・コウ29/コウ18)、ソ2/ザ26・ソ1/ザ49)、**190山**(サン107・セン8/サン51・セン1/サン33)、**191司**(シ10・ス1/シ14・ス3/シ12)、**192聖**(シヨウ8・セイ9/シヨウ1・セイ13/セイ19)、**193達**(ダチ3・タツ20/ダチ1・タツ19/タツ28)、**194長**(ジョウ4・チヨウ41/ジョウ1・チヨウ49/チヨウ50)、**195土**(ト6・ド46/ト18・ド31/ド37)、**196銅**(トウ3・ドウ9/トウ2・ドウ11/ドウ12)、**197独**(トク2・ドク12/トク1・ドク14/ドク31)、**198二**(ジ9・ニ67/ジ3・ニ28/ニ18)、**199壳**(バイ9・マイ1/バイ13・マイ3/バイ25)、**200盤**(ハン1・パン18/ハン1・パン10/パン22)、**201比**(ヒ7・ビ4/ヒ12・ビ2/ヒ15)、**202品**(ビン1・ホン11/ビン15・ホン2/ビン32)、**203文**(フ7・フ9/フ14・ホ1/フ12)、**204別**(ベチ10・ベツ80/ベチ1・ベツ46/ベツ52)、**205没**(ボツ10・モツ3/ボツ12・モツ5/ボツ23)、**206味**(ビ2・ミ45/ビ1・ミ22/ミ43)、**207末**(ビ2・ミ22/ビ1・ミ18/ミ28)、**208妙**(ビョウ1・ミョウ16/ビョウ1・ミョウ9/ミョウ18)、**209猛**(ミョウ3・モウ9/ミョウ1・モウ9/モウ18)、**210領**(リョウ47・レイ2/リョウ26・レイ2/リョウ25)。
- 【c】**211院**(イン15・エン2/イン19/イン13)、**212窮**(キユウ12・グウ3/キユウ11/キユウ16)、**213玉**(ギョク65・ゴク3/ギョク13/ギョク13)、**214近**(キン20・コン1/キン24/キン34)、**215銀**(ギン26・ゴン2/ギン25/ギン14)、**216空**(ク2・クウ23/クウ16/クウ48)、**217計**(ケ1・ケイ11/ケイ24/ケイ32)、**218交**(キョウ6・コウ4/コウ17/コウ42)、**219号**(コウ1・ゴウ10/ゴウ15/ゴウ25)、**220在**(サイ2・ザイ39/ザイ28/ザイ35)、**221失**(シチ1・シツ18/シツ23/シツ41)、**222深**(シン15・ジン16/シン14/シン19)、**223絶**(セツ1・ゼツ24/ゼツ32/ゼツ44)、**224善**(セン2・ゼン68/ゼン19/ゼン27)、**225藏**(ソウ2・ゾウ15/ゾウ13/ゾウ17)、**226造**(ソウ1・ゾウ13/ゾウ19/ゾウ38)、**227断**(タン1・ダン26/ダン29/ダン60)、**228段**(タン4・ダン18/ダン12/ダン17)、**229談**(タン1・タン38/ダン39/ダン48)、**230痛**(ツ2・ツウ11/ツウ19/ツウ28)、**231田**(テン1・デン18/デン19/デン14)、**232回**(トウ1・ドウ77/ドウ51/ドウ69)、**233堂**(トウ6・ドウ40/ドウ22/ドウ14)、**234美**(ビ29・ミ1/ビ11/ビ37)、**235百**(ハク7・ヒヤク48/ヒヤク14/ヒヤク19)、**236密**(ビツ1・ミツ25/ミツ42/ミツ44)、**237勇**(ユ2・ユウ9/ユウ12/ユウ19)、**238良**(リョウ16・ロウ1/リョウ15/リョウ23)、**239歴**(リヤク1・レキ16/レキ12/レキ23)、**240輕**(キョウ5・ケイ12/ケイ16/キン1・ケイ27)、**241青**(シヨウ5・セイ17/セイ12/シヨウ3・セイ15)、**242乱**(ラン72・ロン1/ラン44/ラン61・ロン1)。
- 【e】**243施**(セ14/セ11/シ7・セ7)。
- 【f】**244期**(ゴ17/キ13・ゴ9/キ50・ゴ4)、**245験**(ゲン11/ケン7・ゲン3/ケン7・ゲン3)、**246再**(サイ22/サ1・サイ21/サ1・サイ31)。

- (六) ただし、『日葡辞書』では「シャ」「ヤ(射干)」の二音あるのに対して、『和英語林集成』・日用語辞典では「シャ」の一音しかない「射」字に関しては、ヤ音が実際に衰退したものと思われる。
- (七) ここでは呉音か漢音かの議論を行うことから、唐音や呉音形同士での違いなどが関わる 61 72 89 113 115 127 141 176 181 191
211 237 242 246 は考察の対象から除外する。
- (八) このあたりの事情は、石山(二〇一八)で「勇」「末」などを題材にして指摘した。
- (九) 「一」には τ 入声韻尾の問題が存することから、『日葡辞書』を集計の対象から外し、『和英語林集成』と日用語辞書でも促音化例は除いた。太線で囲ったのは、屋名池(二〇〇五)で言及されている読み分けである。
- (十) ジン：白哲人、一箇人、尊大人／ニン：挨拶人、媒酌人、謀判人、代言人、代議人、堂上人、原告人、解死人、下手人、供奉人、奉公人、保証人、発頭人、加判人、介抱人、寄宿人、細工人、世話人、支配人、証拠人、対手人、厄介人
という分布である。ジンの少なさが気になるところであり、なお用例を収集して検討したい。